

## ＜翻訳＞ 勲章を披露する老女（1917）〔前編〕<sup>1</sup>

作： ジェイムズ・マシュー・バリー

訳： 秋田大学 大西 洋一

三人の善良な老女と、もっと善良な一人の罪深き者が、お茶を一杯飲みながら戦争について話している。客人を迎える女主人である罪深き者は、「お茶を一皿 (a dish of tea)」と呼んでいるので、カレドニア [スコットランド] の生まれであることがわかる。もっとも、それが彼女の罪だというわけではない。

女たちはみなロンドンの雑役婦であるが、女主人を含むそのうちの三人は、いわゆる「雑役婦兼務 (charwomen and)」、あるいは単純に「兼務人 (ands)」と呼ばれる職に就いている。「兼務人」とは、必要とあれば家計管理人をも兼ねる人のことである。職業斡旋所の帳簿に彼女の名はそのような者としてインクで記載され、職員との間でカウンター越しにお金のやり取りが行われている。ハガティ夫人のように、雑役婦以外の何ものでもない人とは大変異なる社会的地位についているのだ。ハガティ夫人は、この場に居合わせているけれども、招待されてお茶会に来ているわけではない。ダーウィ夫人がタマキビ貝を買うのを目にし、彼女の後を追って降りてきて、お芝居に無理矢理入り込み、われわれの意に反して腰掛けたのである。彼女を力づくで追い出すか、少なくとも彼女の名前は小さな文字で印刷したいところだが、ハガティ夫人はすぐに腹を立て、誰も私のことを敬ってくれやしないと嘆いたりするのだ。もう紛れ込んでしまったのだから、座っていてもかまいませんよ、ハガティ夫人。ただし、お静かに。

われらが女主人であるダーウィ夫人は、今のところ家庭管理に関しては何の仕事も行ってはいない。しかし、彼女はそれではがっかりなどしていない。彼女のような人間にとって家庭管理とは、お金の面では余得であり、世間的には栄えある後光に過ぎないものなのだ。もし所得税申告用紙を与えられる栄誉に浴するとしたら、恐らく彼女はわずらわしい小さな空欄の一つに「職業—雑役、専門技能（ある場合）—家庭管理」という言葉を書き入れていたであろう。彼女のこの家は、あなたが道に迷った時にだけ目にするたぐいの、あの「知ったこっちゃない通り」のひとつにある（あなたの家のお仕事をするために、ここから彼女は手押し車をお供にして、威風堂々としばしのお出かけをするのである）。そのよう

<sup>1</sup> 本稿は、ジェイムズ・マシュー・バリー (James Matthew Barrie, 1860-1937) による一幕劇「勲章を披露する老女 (*The Old Lady Shows Her Medal*)」(1917) の本邦初訳である。翻訳の底本としては、James Matthew Barrie, *The Plays of J. M. Barrie in One Volume* (New York: Charles Scribner's Sons, 1945) 所収のものを使用し、後編と解題は次号に掲載予定である。

な通りを見つけたら、それを当局に報告するのがあなたの務めである。当局は直ちにその通りをロンドン地図に加えるだろう。それゆえ、われわれはいまフライデー通りを届け出ているのである。明日の新聞用に描かれた略地図では、その通りは「あの罪深き者が住んでいた通り」と呼ばれ、ダーウィ夫人の家のある場所には×印がつけられるのだ。

彼女の住まい<sup>2</sup>は、実際は一部屋だが、二部屋あると彼女は言い張っている。であるから、文句など言わずに二部屋あるということにしよう。もう一つの部屋というところには窓はなく、そこで古めかしいスカートをはためかせれば、必ず何かをひっくり返してしまうのだ。いちばん堂々と飾ってあるのは、ふた付きの食器棚の上に置かれたブリキの鍋と陶器だ。その台所用品を片づけてふたを開けさえすれば、見よ、温水と冷水が出る浴槽のお出ました。ダーウィ夫人は、これがついていることが大層ご自慢であり、見せびらかす時には、とはいっても恐らくは頻繁にそうしているのだが、まずはこぶしを握りしめて（変な婆さんだ）静かに近づくようにと合図を送る。それから、つま先立ちで棚まで行き、まるでお風呂に不意打ちを食わせるかのように、ひょいとふたを開けるのだ。そして、あなたが親切にも驚嘆の声を上げてやれば、唇をぺろりとなめて謙遜するのである。

本当の部屋の方にはベッドがある。もっとも、事情をごく手短かに説明すればそうなるということだが。もしあなたがダーウィ夫人に好意を持っているのであれば、正しい切り出し方は、ベッドがないのはかわいそうだと言ってあげるのである。彼女のご機嫌がすこぶる良ければ、ダーウィ夫人はくすくす笑い、ベッドがないと本当に大変で、とうなずくだろう。いわば、できるだけ長いこと、人にそう思わせておくのである。そうしてから、またあのネズミのような動きで、急にベッドをあなたの目の前に出現させるのだ。あなたはそれを衣装箆笥だと思っていたのだが、壁から引き下ろすと、見よ、ベッドの出来上がり。彼女の住まい（ご覧いただいたように、台所、食料貯蔵室、寝室、浴室の四部屋を備えていることになる）には、人をびっくり仰天させるようなものは他には何も無いが、「半端もの」でいっぱいである。それら一つひとつを現金で買い、眺めてはほくそ笑み、手入れをしてやると彼女の一部となるのだ。「立派なダーウィ家」と商人たちなら呼ぶだろう。とはいえ、ここには半クラウンで売れるものはベッドの他には何も無いのだが。

彼女の家は地階にあるので、眺めは地下に続く階段の頭上を通り過ぎる人々の下半身に限られる。夏の夕べにこの窓辺でダーウィ夫人がするのは、おセンチになって球根がたったひとつだけ植えられている花瓶を見つめることでも、小さく見える空に思いを寄せて目をやることでもない。彼女がうってつけの場所にいるため目に入ってくる靴下の穴やら何やらを、いやしくも楽しそうに見つめているのだ。立派な読者諸賢よ、あなたは通りの人々

<sup>2</sup> 本作品を映画化した『七日間の休暇 (Seven Days Leave)』(1930)を見れば、パリーが描いたダーウィ夫人の住居の特徴（温水と冷水が出る狭い浴槽、引き出し式のベッド、地階の窓）が、うまく再現されているのがわかる。

があなたの晴れ着に恐れ入っていると思いながら、これ見よがしに通り過ぎているかもしれないが、あなたの靴の底がきちんと修理しなければいけないほどすり減っていることが、ダーウィ夫人にはわかるのだ（おまけに、夫人は実際にそうだと知っているのだ）。

また、視界がこのように限られている人々にとっては、下半身は顔と同じぐらいいろいろなことを表すので、裁判所に出たとしても数多くの通行人について証言することができるだろう。

これら四人のにぎやかな老女たちは、テーブルについて楽しいひと時を過ごしており、気の利いたことばがよどみなくあふれ出している。彼女たちの普段着とバケツとモップ（そちらはそちらで、隅っこでちっちゃなお茶会を開いているところだ）を見ればわかるように、これはさかのぼること昨日に出された招待によって開かれた集まりではなく、まったくのくだけた会である。前もって念入りに準備された宴よりも、興味が引かれると思いませんか。こういう会がどのように始まるか、ご存知のはず。それも戦時中のこと。きっとダーウィ夫人が、たまたま通りでトウィムリー夫人とミックルハム夫人に会って、ただ暇つぶしをしようとしただけなのだ。そして、当然ながら「カモフラージュ (camouflage)」などという言葉が口に出されて、彼女たちの会話は熱を帯びるのだが、最終的にトウィムリー夫人が謝ることになる。そして、不思議なことにいろいろなことがつながっていき、タマキビ貝売りの男が現れたことで、ダーウィ夫人はあのジャム瓶を持っていたことを思い出し、そして前はミックルハム夫人がおごったということ思い出したのだ。それで、彼女ら三人は地階に続く階段を下りてきて、彼女たちの後をあのハガティ婆さんがへこへこしながらついてきたのだ。

このご婦人たちはとても陽気に楽しんでいたが、懸命に働いたこの四人の老女たちほどそうするのにふさわしい人は他にはいなかっただろう。戦時に女性ができることすべてを、彼女たちは日々いそいそと行っている。ちょうど家の男たちが前線でそうしているようにだ。そして今はモップとバケツを脇に置き、手足を伸ばして、しとやかにくつろいでいる。彼女たちの側としては、戦場で決定的な勝利が得られるまでは（サラ・アン・ダーウィの言葉）、ドイツ皇帝が回れ右をして退却し（エマ・ミックルハムの言葉）心底しょげ返ってしまうまでは（アミーリア・トウィムリーの言葉）、講和の条件について考えるつもりはまったくないのだ。

ダーウィ夫人の役を演じることになるご婦人は、このお茶会において、われらが女主人公が、ひそかな哀しみ、すなわち罪を隠していることをほのめかしたいときと思うはずである。しかし、皆様にご覧いただくように、そのような考えなど彼女の頭から追い出してしまおう。ダーウィ夫人は、自分が罪深き人間だということを知っているが、彼女を演じる女優とはちがひ、自分の秘密が間もなくあばかれることになるとはつゆ知らない。彼女にならってスコットランド流のぶっきらぼうな言い方をすれば、その「連中 (clanjamfry)」

全員の中で彼女が一番浮かれ騒いでいるのだ。彼女はお客たちにもっとお茶をと勧めるが、もう十分すぎるほどいただいていることをわきまえた淑女の丁寧な所作で、客人たちは手を振って断るのであった。

ダーウィ夫人 ミックルハムさん、貝をもう一つだけいかがです。

(実際、もう一つしか残っていない。しかし、ミックルハム夫人は、もしそれをいただいてしまえば、泳いで取りにいかなきやなくなると丁寧に示す。それをずいぶん時間がたってからいただくのが、ハガティ婆さん。彼女は誰も見ていないと思ってそうするのだが、それは大間違い。)

トウィムリー夫人はといえばご機嫌が悪い。明らかに、誰かが彼女に口答えをしたのだ。恐らくハガティ婆さんだ。)

トウィムリー夫人 きっとそうです。

ハガティ婆さん そうかもしれんけどね。

トウィムリー夫人 私は当然知っています。なにしろ息子をドイツで捕虜にとられているんですからね。(彼女は明らかにこれで優位に立ったため、ここでやめておくのが親切心というもの。しかし、彼女はいやらしくもさらに続ける。) そのような誇らしき不運に見舞われたのは、この中では私だけです。(他のものたちはチクリとやられる。)

ダーウィ夫人 私の息子はフランスで戦っています。

ミックルハム夫人 私のは二ヶ所で傷を負ったわ。

ハガティ婆さん 私のはサロネアイキーにいるよ。

(この教養のない人物の馬鹿げた発音にみんなは笑う。)

ダーウィ夫人 すいませんけど、ハガティさん、正しい発音はサロニッキー<sup>3</sup>ですわ。

ハガティ婆さん(狼狽したのを隠そうとして) そうは思わないけどね。(こう言っても自分の主張が証明されはしないと感じる。) あたしや戦時貯蓄証書を持つものとして言ってるんですがね。

トウィムリー夫人 みなさんお持ちです。

(ハガティ婆さんは泣きそうな声を出し、他の客人たちは冷たい侮蔑のまなざしで彼女を見る。)

ダーウィ夫人(陽気さを取り戻そうと) まあ、ひどい戦争だわね。

全員(顔を輝かせて) 本当。その通り。

ダーウィ夫人(力を得て) 私が申し上げているのは、兵士たちは素晴らしいんですが、

<sup>3</sup> 原文は Salonikky。テッサロニキ (Thessaloniki) やテサロニカ (Thessalonica)、またはサロニカ (Salonica) の名前で知られるギリシャの都市。第一次世界大戦時に、「マケドニア戦線」(または「サロニカ戦線」と呼ばれた戦闘が行なわれた地。

将校たちについては安心してはいられないんですよ。そこが弱点ですよ、ミックルハムさん。

ミックルハム夫人（弁護に立たされるが、敵方を利するかもしれぬことは何一つ明かすまいと決意して） 言うておきますが、将校たちは大丈夫です。

ダーウィ夫人 あなたにそう言うただけだと、安心ですわね。

（ここでハガティ婆さんが、残っている貝をいただく。）

ミックルハム夫人 塹壕戦<sup>4</sup>のことをちゃんとご存じないようね。もし地図があれば――

ダーウィ夫人（指を濡らしてテーブルに線を引く。） これがソンム川<sup>5</sup>ね。さて、ここで弾幕攻撃をすれば――

トウイムリー夫人 すぐに縦射攻撃を受けるわよ。あらあなた、どこに援軍はいるのかしら。（ダーウィ夫人はしよげかえる。）

ミックルハム夫人 誰も皆さんが把握していないのは、これが砲火戦だということ――

ハガティ婆さん（貝を食べて元気がついて） サロネアイキーの方が正しいと思うんだけどねえ。（他のものたちは皆、口を閉じる。）

トウイムリー夫人（恐い口調で） 話題を変えましょう。『ファッション・チャット』の今週号はご覧になったかしら。（彼女は明らかに今週号を見て、むさぼり読み、残ったパン屑さえもなめ尽くしたのだ。）アコーディオン型プリーツがついたギャバジン織の服は、もうまったく流行遅れになってしまったそうよ。

ダーウィ夫人（顔をきらめかせて） あらまあ。どういふことなのかしら。

トウイムリー夫人（重大な話題を話す時に生じる高慢さを多少示しながら） そして、無地のスモックがまた流行り出したそうよ。絹のレースがついたやつで、なまめかしくて粋な感じがするんですって。

ダーウィ夫人 あら！

ミックルハム夫人 私はいつもまっすぐなラインが好みなんですけど。（トウイムリー夫人の体形にはまっすぐなラインがないことを見て気を使い） もっとも、親しみやすい体型の方には大変ですけどね。

（ここでハガティ婆さんの指が目立たぬように角砂糖に近づく。）

トウイムリー夫人（最高天の神々の領域にまで漕ぎ出していき） レイディ・ドリー・カニスター様が上品な最新流行の服を身にまどって、手すり越しに話しておられるのがお

<sup>4</sup> 「塹壕戦 (trench warfare)」は、第一次世界大戦を特徴付ける戦闘形態。この後、4人は、恐らくは覚えたての「弾幕攻撃 (barrage(s))」、「縦射攻撃を受ける (enfiladed)」、「援軍 (supports)」、「砲火戦 (artillery war)」などの用語を使いながら、戦争について話し続ける。

<sup>5</sup> 原文では、“the River Sommy”。1916年7月に始まった「ソンムの戦い (the Battle of the Somme)」は、第一次世界大戦における最大の会戦。

見受けされたそうよ。

ダーウィ夫人 わたしもぜひ見てみたかったわ。

トウイムリー夫人 彼女は女中にも、主婦にも、軍需工場員にも等しく人気があるのよ。  
二人のお子さまの姿がはめ込み写真で出ているわ。レイディ・ポップス・バビントン様  
はチュール地のドレスで結婚式をされたようよ。

ミックルハム夫人 新婚旅行用のは、どんなドレスだったのかしら。

トウイムリー夫人 シャンパンクリーム色のヴェルヴェット地で、すばらしいコサージュ  
をつけていたわ。結婚されたのはチングフォード大佐——イートン校ではみんなに「獅子鼻」と呼ばれていたんだって。

ハガティ婆さん(砂糖をたいらげてしまって) きっとサロネアイキーに送り込まれるさ。

ミックルハム夫人 どこに派遣されても、あの方も私たちみんなと同じように不安を感じるのよ。あなたや私と同じように、あの方も鉛筆で書かれた手紙をほしがるとよ。

トウイムリー夫人 あ鉛筆書きの手紙！

ダーウィ夫人 (やさしいスコットランド訛りの声で、おずおずと、出過ぎたことを言ってしまうのではないかと恐れながら) そして、敵国の女たちもあの鉛筆書きの手紙をも  
らったかと思えば、やがて受け取らなくなるようになる。私たちと同じ。たまにはそんなふう  
に考えてみましようか。

(彼女は言い過ぎてしまった。椅子が押し下げられる。)

ハガティ婆さん あらまあ、あきれたこと。

ミックルハム夫人 ダーウィさん、それはひどい言い草よ。

ダーウィ夫人 (恐れおののいて) どうかお許しください。誓って言いますが、私は反戦  
主義者じゃありませんから。

ミックルハム夫人 まあ、よろしいわ。

トウイムリー夫人 男性の親族がまったくいない女たちのことについて聞いたことがありますけど、つまり、戦争に行っている男連中がだれもいないのよ。そういう女たちにつ  
いて聞いたことがありますけど、けっしてそんな人たちとは付き合えないわ。

ミックルハム夫人 私たちのようなものは、そういう女たちにどう言ってやればいいのか  
しら。その女たちは戦争を戦っていないってことよね。

ダーウィ夫人 (思い悩むように) 哀れんであげなきゃいけないわよ。

ミックルハム夫人 でもね、そんな女たちは、ブラインドを下ろして家の中にこもって  
なけりゃならないわ。

ダーウィ夫人 (急いで) そこがそんな女たちのいるべき場所よね。

ミックルハム夫人 今日、そんな女の一人が旗を買っているのを見たわ。なんてずうずう  
しいのかと思ったわ。

ダーウィ夫人（おとなしくなって） そうよね。

ミックルハム夫人（謙遜しているように見せようとするが、たいして成功もせず） 昨日、息子のパーシーから手紙をもらったの。

トウイムリー夫人 アルフレッドは自分の写真を送ってきたわ。

ハガティ婆さん サロネアイキーからの手紙はめったに来ないからね。

（三人の胸は高鳴るが、悲しいことにダーウィ夫人の胸はそうはならない。彼女は辛抱強く唇を噛み締める。）

ダーウィ夫人（罪人である） ケネスは毎週私に手紙をくれますわ。（感嘆の叫びが上がる。恐れを知らぬ老女は手紙の束を高々と掲げる。） ご覧になって。みんなケネスの手紙よ。

（ハガティ婆さんは顔をしかめる）

トウイムリー夫人 アルフレッドは手紙を書く暇なんかないわ。なんたって砲兵下士官ですからね。

ダーウィ夫人（容赦なく） あなた方へのお手紙の書き出しは「愛しき母上」かしら。

トウイムリー夫人 たいていはね。

ミックルハム夫人 決まってそう。

ハガティ婆さん いつもだよ。

ダーウィ夫人（ノックアウトパンチを繰り出して） ケネスの手紙の書き出しは「最愛なる母君」だわ。

（誰もよい返答を思いつかない。）

トウイムリー夫人（最善を尽くそうとして） 背が低いんでしょうね、あなたのお姿から判断して。

（彼女は答えずにおくべきだった。）

ダーウィ夫人 6フィートと2—2.5インチ<sup>6</sup>よ。

（悲しみが深くなる。）

ミックルハム夫人（もっと良い判断ができたにもかかわらず） キルト<sup>7</sup>を身につけているって、おっしゃったかしら。

ダーウィ夫人 当然ですわ。あの有名なブラック・ウォッチ連隊<sup>8</sup>にいるんですもの。

ハガティ婆さん（ハンカチを出して） サリー・ライフル銃隊（The Surrey Rifles）が一番有名だがね。

---

<sup>6</sup> 約 190 cm。

<sup>7</sup> 原文では、kilty（キルトをはいた人）。kilt は、スカート状の形態をしたスコットランドの男性用の伝統衣装。

<sup>8</sup> The Black Watch (Royal Highlanders) は、伝統あるスコットランド高地人による歩兵連隊のこと。この後、それぞれの息子たちが所属する部隊の名前を挙げて、自慢が始まる。

ミックルハム夫人 ハガティさん、その点についてはあなたと王様の意見が違うようね。

国王が選んだのは、わたしのパーシーがいるイースト・ケント連隊 (the Buffs) よ。

トウイムリー夫人 (王のように威厳を出して) 近衛騎馬砲兵隊 (the R.H.A [the Royal Horse Artillery]) をいただきたい。あとはみな任せる。

ダーウィ夫人 もちろんサリー・ライフル銃隊やイースト・ケント連隊や近衛騎馬砲兵隊に対して別に悪気はないんですけど、みなさんズボンをはいた部隊ですわよね。

ハガティ婆さん みんながみんなキルトをはくわけにはいくまいて。

ダーウィ夫人 (圧倒するように) まさにその通りですわ。

トウイムリー夫人 (愚かにも、抑えられずに言う) あんたのケネスの脚は、毛が生えて太いのかしら。

ダーウィ夫人 すごいわよ。

(悪い女だ。だが、われわれは「哀れなサラ・アン・ダーウィ」とでも言うておこう。

なぜなら、この瞬間に「因果応報の神 (Nemesis)」登場。すなわち、あまり重要ではない役である牧師が、階段の上に姿を現すのだ。)

ミックルハム夫人 牧師様じゃない！

ダーウィ夫人 (彼がもたらすものが何かを知らずに) 見たところ、ブーツの踵を替えたようね。

(ウィリングズ氏については、常にうれしそうな微笑が彼の前を歩むと言ってもよいだろう。この微笑みが彼の生活に音楽を生むのだ。すなわち、彼の見解によれば、彼が小説の中心人物にいま一度選ばれたということなのだ。彼ほどさえない生活を送った人など誰もいないだろうが、彼がそれを知ることはない。自分は神に選ばれし者であると、謙虚でありながらも得意気に、彼は常々考えているのだ。彼については、冒険は冒険心を持つ者のためにあると、もともとは書かれていたに違いない。実際、街角にさしかかる度ごとに、彼は冒険に出会う。たとえば、老婦人がバスから降りる時に手を貸してあげて、何か他にお手伝いできることがあるかと尋ねる。するとご婦人は、肉屋のマドックスに行く道を知りたいと告げる。そこで、彼のやさしく誇らしげな微笑みの登場だ。いつもまず笑みが出てから、あとで説明が続く。「昨日、そこに行ったんです！」これこそ、ウィリングズ氏の元気を保つ冒険のほんの一例である。

戦争が勃発して以来、彼の人生に対する熱意は恐ろしいほど高まった。新聞を取り上げて英雄の話を読めば、必ず同じ名の人間を知っていると彼は思い出すことになる。彼が現在関わっている「兵士の休息」という場所は、かつては陶磁器店であって、(なんとお聞きあれ) 彼は茶器一揃いをそこで購入したのだった。まっただ中にある時、人生とはそのようなものである。時に彼は、自分が大きなスパイ・ドラマの一部となっているような感じを持つ。彼が経験する並外れた出来事のさなかで、もちろん彼は重要人物

と出会い、秘密の知らせを内々に知ることになる。彼がその知らせを人々に伝える前に、皆様が期待するように、まず屈託なく笑みを浮かべることなどしない。それどころか、彼の顔には厳肅な莊嚴さが浮かぶ。とはいっても、結局どちらでも同じことなのだが。その人物の名前を明かす時、まず彼はあたりを見回して疑わしい人物がいないか確認してから、声をひそめてこう告げる。「私はこれをファージング氏ご自身から聞きました——彼はベスナルグリーン地区の幹事なんです——しっ！」

この聖職者にふさわしい椅子を探してこようとひと騒動があったり、こそこそと袖を引っ張りあたりもしているが、彼は勝ち誇ったような微笑みを浮かべながら女たちを見ている。この素晴らしき人は、また得点を上げることになると承知しているのだ。）

ウィリングズ氏（手を振って椅子を断り） ありがとうございます、だが結構。みなさん、お知らせがあります。

ミックルハム夫人 お知らせですって。

ハガティ婆さん 前線からかい。

トウイムリー夫人 私のアルフレッドからかしら。

（みんな急にそわそわする——みんなといっても、この家の主を除いてだが。彼女は、前線から彼女のもとに届く知らせなどありっこないと知っているのだ。）

ウィリングズ氏 まずはみなさんに、すべて順調とお伝えしておきます。お知らせとは、ダーウィ夫人あてのものです。

（彼女は目をみはる。）

ダーウィ夫人 私あてに。

ウィリングズ氏 息子さんのことです、ダーウィさん——息さんが五日間の休暇をもらったそうで。（彼女は少し頭を振る、というか、恐らく首もとが少し震えただけなのかもしれない。）さあ、さあ、よい知らせは厄介なことはありませんからね。

トウイムリー夫人 よかったわね、ダーウィさん。

ダーウィ夫人 本当なのですか。

ウィリングズ氏 間違いありません。もう息子さんは着いておられますから。

ダーウィ夫人 ロンドンにいるんですか。

ウィリングズ氏 ええ。息子さんとお話しましたよ。

ミックルハム夫人 あなた、ついてるわね。

（彼女が運がいいようには見えないと思っているかもしれないが、このようなことが降り掛かる時、人々の様子は様々であることを経験から彼女たちは知っている。あ）

ウィリングズ氏（物語を語りながら、ますます驚嘆して） みなさん、まさに夢物語なのです。実は、私は——（あたりを注意深く見渡すが、みんな信用できることは知ってい

る) —セントラル・ストリートの「教会軍<sup>9</sup>」宿舎にいて、行方不明になった兵士たち一、二名の手がかりをつかもうとしていました。すると突然、私の目が—なぜだか説明なんかできそうにありませんが—突然、私の目が、装備を足下に置いてちよっとものさびしそうにベンチに座っているハイランド人をとらえたのです。

ハガティ婆さん 大男かい。

ウィリングズ氏 とてもたくましい人です。(ハガティ婆さんはうめく)「さあ、あなた」私はすぐに声をかけました。「よくブライティ<sup>10</sup>にお戻りになりました」私はこの国をブライティと呼ぶことにしているんですよ。「何か私でお役に立てることはありませんか」と言うと、彼は頭を振りました。「どこの連隊ですか」と尋ねると、(ここで彼は上手に声を落としてささやくように言う)「ブラック・ウォッチ連隊、第五歩兵大隊」と言いました。「お名前は」と尋ねると、「ダーウィだ」と答えたのです。

ミックルハム夫人 あらまあ。これは驚いたわ。

ウィリングズ氏 (どのように話が進んだのかを椅子を使って示しながら) このように彼の肩に手をおいて、「ケネス・ダーウィさん、私はあなたのお母さんを知っています」と言ったのです。

ダーウィ夫人 (唇をなめて) それに何と答えたの。

ウィリングズ氏 彼は信じられないというような様子でした。実際、彼は私のことを頭のいかれたやつと考えたようです。でも私はすぐに言いました、彼をあなたのところへ連れて行ってあげると。あなたがいつもどれだけ息子のことを私に話しているかも教えてあげました。

ダーウィ夫人 ここに連れてくるの!

ミックルハム夫人 ここにわざわざ連れてきてもらわなければいけないのかしら。

ウィリングズ氏 着いたばかりで、この大都市に戸惑っておいででした。スコットランド人らしく黙って私の話に耳を傾けると、彼は不思議なことに笑いはじめました。

トウイムリー夫人 笑ったの。

ウィリングズ氏 (未開での生活で大変奇妙な民族とも出会っていたので) トウイムリーさん、スコットランドの人は、私たちとは違った感情の表し方をするのです。彼らの場合、涙ははしゃいでる気持ちを意味し、陽気に振る舞っていれば悲しみに打ちひしがれていることを示すのです。私が話を終わると、彼はすぐにこう言いました。「それじゃあ、ばあさんに会いにいこうか」と。

ダーウィ夫人 (あとずさりする。ウィリングズ氏が話を始めてから彼女が動いたのはそれ

<sup>9</sup> 原文は the Church Army で、英国国教会の伝道・社会奉仕組織。

<sup>10</sup> Blighty は、(外地から見た) 英本国を表す名称で、戦時中にしばしば使用された。

が初めて) あの子が——来るの。

ウィリングズ氏 (誇らしげに) もう来てますよ。上にいます。まず私がこのうれしい知らせをあなたに伝えた方がいいと思うと言っておきました。

(三人の女たちが窓辺に駆け出す。ダーウィ夫人は食料貯蔵庫を見るが、そこは内側からは鍵がかからないことを思い出す。ダーウィ夫人は固まって立ちすくみ、顔がとても白くなってしまう。)

ダーウィ夫人 みなさんにお引き取りいただくようお願いしていただけますか。

ウィリングズ氏 皆様、この幸福な再会の瞬間に皆様はお邪魔かと思えます。(彼は自分で払う覚悟のない犠牲を女たちに願うような男ではないので) 私も早速おいとまします。

(みんなダーウィ夫人を見やり、理解する——というか、理解したと思う)

トウィムリー夫人 (バケツとモップを手にして) もし私の息子のアルフレッドが戸口に立っていたとしたら、皆さんにいていただきたくはないわね。

ミックルハム夫人 (同じく悩ましく思いながらも) 私も同じよ。ダーウィさん、降りてくるようにお伝えしましょうか。(ダーウィ夫人は聞いていない。おびえながら、階段で足音がしないか耳をすましているのだ。) ご覧なさい、まああんなに喜んで。手紙を握りしめてるわ。

(三人の女たちが出て行く。ウィリングズ氏はダーウィ夫人の肩にやさしく手を置く。彼は完全にこの状況を把握していると思込んでいる。)

ウィリングズ氏 ダーウィさん、そんなに手紙を書いてくるなんていい息子さんですね。

(われらが年老いた罪人は身を震わすが、手紙をさらにぎゅっと握りしめる。ダーウィ兵卒が下りてくる。)

さあダーウィさん、あそこです、手紙を持って待ってらっしゃいますよ。

ダーウィ (いかめしく) そりゃ、すごい。

(ウィリングズ氏は、まさに善良な紳士よろしく、一目たりとも後ろを振り返ることなく階段をのぼる。そして、ダーウィ親子二人が残されるが、二人は部屋の両端にまるっきり離れて立っている。この男は、スコットランド生まれらしい大きくて、荒々しくてたくましい男だ。顔の彫りは女によく似ているというよりは、女の顔から鷹揚に掘り出したといったところか。いたるところ泥まみれのブラック・ウォッチ連隊の軍服を着て、装備一式やその他の持ち物すべてを背中にかついでおり、プリンス・チャーリー<sup>11</sup>と共にダービーまで行軍した彼の祖先たちもさもありなんとと思われるくらいの恐ろしい姿であった(しかし、それほどぼろぼろではなかったが)。男は黙って立ち、さあ顔を上

<sup>11</sup> チャールズ・エドワード・ステュアート (Charles Edward Stuart, 1720-1788)。ステュアート王朝の血筋を引く「若僭王 (The Young Pretender)」と呼ばれたチャールズを王位に就けようとした、1745年のジャコバイト反乱への言及。

げてみると言わんばかりに、婆さんのことをにらみつけている。女の方はそうしたいのはやまやまである。というのも、彼女は息子の姿を初めて一目見たいと思っているのだ。やがて男が口を開くが、それは婆さんへの当てこすりだ。）

あんたの愛する息子がわかるかな、婆さん。（「ああ、いいスコットランド訛りね」と、彼女は思う。）

ダーウィ夫人（震えながら）　たくさん手紙を書いておいてよかったわ。（「あら、立ち上がったわ」）

（彼は大股で歩み寄り、荒々しく手紙をつかむ。）

ダーウィ　じゃ、見てみるとするか。

（手紙の束はひもでしばってあるので、男はそれをほどくと、面白そうにゆっくりと手紙を調べる。手紙は順番に並べられており、すべて鉛筆で「ダーウィ夫人」と宛名が書かれていて、「検閲官により開封」という文字が誇らしげに付されていた。しかし中の便箋には一言も書かれていない。）

ダーウィ　ただの白紙じゃないか。封筒にあるのはお前が鉛筆書きしたのか。

（女がうなずくので、男はこの問題についてさらに考えてみる。）

みんな、あんたが雑役婦だと言っていたな。だったら、くずかごか何かから封筒を拾ってきて、それで宛先を変えたんだろう。

（女は再びうなずく。なおも女は顔を上げられないでいるが、男の足に見とれている。

しかし、男が手紙を火の中に投げ込もうとすると、女は突然、顔を紅潮させて力をふりしぼり、その手紙をつかみ取る。）

ダーウィ夫人　その手紙を燃やさないでくれよ。

ダーウィ　本物の手紙じゃないだろう。

ダーウィ夫人　それで全部なの。

ダーウィ　（皮肉に戻って）あんたには息子がいると思ったがな。

ダーウィ夫人　私には、夫も息子も何もいないわ。「夫人」とつけているのは、立場を考えてのことなの。

ダーウィ　そうか、それはおれも見抜けなかったなあ。

（壁に何か説明を得られるものはないかと、彼は見やる。ついに彼女は、彼の姿をのぞき見る。ああ何とすばらしい体格の男だ。ああなんと足の長いこと。ああ彼の怒りは高貴なるかな。ああサムソンもあの女〔デリラ〕が手にかき抱くまではかくの如しか。）

ダーウィ　（振り向いて彼女の方を見て）なぜこんなことをしたんだ。

ダーウィ夫人　この戦争はみんなの戦争なのよ、私をのぞいてね。（両腕をばたつかせる。）

私はこの戦争を私の戦争にしたかったのよ。

ダーウィ　もっとわかりやすく言ってもらわないと。とはいえ、嘘つきのペテン師ババア

の言うことなど聞いちゃいけないがな。

(そのような言葉は当然予期していたものであったため耐えられるのだが、彼がドアに向かって動き出した。)

ダーウィ夫人 まだ出て行ったりしないわよね。

ダーウィ いいや出てくよ。ここに来たのは、おれがどんなに怒っているかを、お前さんに伝えるためだからな。

ダーウィ夫人 (焦がれるように腕をのばして) まだ伝わってないわよ。

ダーウィ お前、ずうずうしいな!

ダーウィ夫人 (厚かましさをさらに示して) お茶を飲んでいかないのかい。

ダーウィ おれがか! 言っとくがな、おれがここに来たのはただ一つ、お前さんにぶちまけてやるという目的のためなんだよ。

(轟くような声ではねつけられたため、彼女は椅子へと吹き飛ばされる。だが、彼女はすぐさま再び立ち上がるのだ、この元気なばあさんは。)

ダーウィ夫人 あんたがぶちまけている間に、お茶も飲めるでしょうよ。貝があるからね。

ダーウィ ほんとうか。

(彼は興味を引かれて食卓の方を向くが、誇り高いスコットランド人氣質が彼の行動を抑える。それはそれで好都合。なぜなら、ついさっきまでは貝があったと彼女は言うべきであったのだから。)

いや、おれはいい。お前は、ただの卑しい悪党だ。(彼は食卓から離れたところに腰を下ろす。) さあ、吐いちまえ。座るんだ!(彼女はおとなしく座る。彼に言われてしないことは何もないのだ。) お前は雑役婦をしているそうだが、すると一日中立ち仕事か。

ダーウィ夫人 むしろひざをつけて仕事してますよ。

ダーウィ お前はおれに対してそうしなきゃいけないんだがな。

ダーウィ夫人 あら、喜んでひざまづくわ。

ダーウィ よせやい。この嘘つきババアめ、それでどうした。

ダーウィ夫人 あたしの名前がダーウィなのは、本当。

ダーウィ それを聞いただけで、自分の名前を変えたくなるな。

ダーウィ夫人 覚えている限り、あたしはずっと、ずっと、ずっと雑役婦の仕事をしてきたわ。ここ二十年間ロンドンにいるのよ。

ダーウィ 昔話は飛ばしてくれ。人と会う約束があるんだからな。

ダーウィ夫人 そして、あたしが年をとってから、戦争が始まった。

ダーウィ それがお前さんに何の関係があるんだ。

ダーウィ夫人 ええ、そこよ。戦争はあたしには何の関係もなかった。みんなには関係があったけど、あたしには何の関係もなかった。近所の人たちは、みんなあたしを見下し

たの。壁にかかったポスターの「行け、息子よ (Go, my boy)」と言ってる女でさえもあ  
たしをにらんでいた。時々、暗闇の中でひとり泣いたわ。お茶もう一杯飲むかい。

ダーウィ いいや結構。

ダーウィ夫人 すると突然、息子がいるふりをしようという考えが頭に浮かんだの。

ダーウィ このくされババアめが。だけど、英国陸軍全兵士の中から一体全体なぜおれを  
選んだんだ。

ダーウィ夫人 (くすくす笑いながら) 多分あなたのことが一番好きだったからね。

ダーウィ おい、おい、ばあさん。

ダーウィ夫人 ある日、新聞で読んだの。「そこで彼は、ブラック・ウォッチ連隊第五歩兵  
大隊所属K・ダーウィ兵卒の援助を受けた」

ダーウィ (うれしくなって) そうか。まあ、おれが新聞に出たのはそんな時だけだな。

ダーウィ夫人 それだけであなたを選んだわけではないわ。まずあたしはブラックウォッ  
チ連隊の歴史を読んだの。ブラックウォッチが世界一の連隊であることを確かめるため  
にね。

ダーウィ 誰でもあんたにそう教えてくれたらうに。

(今度はずっと機嫌よく歩き回り、途中でパンの塊を見つけると一片を切り取る。ほと  
んど意識しないで彼はこうしているが、ダーウィ夫人は承知している。)

おい、あんたのスコットランド訛りはいいな。丘の小川が波打ち流れるようだ。

ダーウィ夫人 あたしが生まれたところのそばをプロセン川<sup>12</sup>が流れてるのよ。多分、あの  
川が話し方を教えてくれたのね。

ダーウィ うん、そうだな。

ダーウィ夫人 ブラックウォッチ連隊のバグパイプ吹きの幽霊について読んだことがある  
わ。ブラックウォッチ連隊の兵士たちががんばっていると、誇り高く笛を吹き、兵士た  
ちが倒れると一層誇らしげに吹くそうよ。

ダーウィ そういう馬鹿げた話もあるな。

(彼は、何気なくもう一度パンを切り取る)

だけど、そんな時にお前がここに住んでいたわけがないな。さもなきゃあてずっぽうだ。  
引っ越したのか。

ダーウィ夫人 そうさ、11 シリング6 ペンスかかったわ。

ダーウィ おれの名前のKがケネスだって、どうやってわかった。

ダーウィ夫人 そうなの？

---

<sup>12</sup> Prosen Water は、スコットランドのアンガス (Angus) 州 フォーファー (Forfar) 近くを  
流れる川の名前。

ダーウィ　なんだと！

ダーウィ夫人　寝ている時に天使がささやいてくれたのね。

ダーウィ　まあ、この悪巧みの中に出てきた唯一の天使か。

（彼はくすりと笑う。）

おれが顔を出すなんて思いもしなかったろうに！（突然、彼女の方を向き）それとも、そう思ってたのか。

ダーウィ夫人　あなたの姿を見てみたいと思い始めていたのよ、ケネス。

ダーウィ　いま何て言った。

ダーウィ夫人　ダーウィさん。

（彼は勝手にバターをとる。彼女はジャムの瓶を差し出すが、彼は偉そうにしてこれを断る。皆さんは、彼女がこれに屈すると思いますか。まったくそんなことはありません。）

ダーウィ　（再び皮肉な口調で）おれの姿を見たんだから、これで至極ご満悦ってとこか。

ダーウィ夫人　とてもうれしいわ。あんたの家族はスコットランドに住んでいるの。

ダーウィ　グラスゴウだ。

ダーウィ夫人　両親ともご健在。

ダーウィ　ああ。

ダーウィ夫人　あんたのお母さんは、あんたのことを大層誇りに思っているでしょうね。

ダーウィ　当然さ。

ダーウィ夫人　ご両親のところに行くの。

ダーウィ　まずはロンドンでひと騒ぎしてからな。

ダーウィ夫人（かぎつけて）　ということは、ロンドンに彼女がいるのね。

ダーウィ　誰のことだ。

ダーウィ夫人　あなたの恋人よ。

ダーウィ　妬んでいるのか。

ダーウィ夫人　なんであたしが。

ダーウィ　そんなことする必要ないわな。彼女は若いんだから。

ダーウィ夫人　あらまあ驚いたわ。きっと美人さんなんでしょうね。

ダーウィ　そりゃ間違いないさ。（ジャムを塗ってみる。）称号付きのお方だからな。彼女は女中にも、主婦にも、軍需工場員にも人気があるからな。

（ダーウィ夫人は、社交界ゴシップの読者にはおなじみのレイディ・ドリー・カニスターのことを思い出す。そして、とても狡猾な表情が彼女の顔に浮かぶ。）

ダーウィ夫人　ねえ、彼女のことをもう少し教えてちょうだい。

ダーウィ　彼女はいろんなものを贈ってくれたなあ。特にケーキや、ウーステッド製のチョコッキもあったな。同封していたカードには、愛情こもったメッセージもついていたさ。

(老女はいま興奮でうち震えている。抑えておくことができなくなり、腕は喜びのあまりあっちこっちと飛び上がる。)

ダーウィ夫人 あたしのケーキを試してみるかい。

ダーウィ おれはいいよ。

ダーウィ夫人 あたしが自分で作ったものよ。

ダーウィ いや、遠慮しとくよ。

(変に小走りをして、彼女は食料貯蔵室に入っては、また戻ってくる。彼女は、彼の前にケーキを押し出す。それを一目見て、彼はぼかんと大口を開ける。)

ダーウィ夫人 どうしたの。教えて、ねえ、教えてよ。

ダーウィ 奥方様がお贈りくださるケーキと寸分違わず同じものだ。

(ダーウィ夫人は、今や輝かしき老夫人となりおおせる。)

ダーウィ夫人 チョッキはちょうどよかったかい。ブラック・ウォッチの色〔深緑と濃紺と黒からなるタータンチェック〕がお気に召せばいいんだけど。

ダーウィ なん——だと！ お前が作ったのか。

ダーウィ夫人 自分の名前を出す勇氣はなかったの、そうでしょ。彼女のことはいつも新聞で読んでいたからね。

(困り果てた男は彼女を見下ろすように立つ。これを最後と恐ろしい表情で。)

ダーウィ このアマめ。お前を厄介払いすることはできないのか。

ダーウィ夫人 怒ってるのかい。

(ダーウィは、うめきながら腰を下ろす。)

ダーウィ こん畜生！お茶をくれ。

(彼のために食事の準備をしようと、彼女は走り回る。彼女は体中で「おお、栄光よ、栄光よ、栄光よ！」と叫び交わしたい気分である。少しの間、彼女は彼の椅子の後ろをうろつき、「ケネス！」とつぶやく。「何だ」と尋ねるが、彼女が無礼な物言いをしていることにもはや気づいてはいない。「何も」と彼女は言う。「ただケネスと言っただけ」そしてうれしそうにお茶道具を取りに行く。しかし、お茶が注がれ、一皿飲み干すと、二口も食べぬうちに彼に自己保存の本能が戻ってくる。) 【後編に続く】